2　首都圏の需要を中心とした12月の見通し

11月初旬の情報では、西南暖地産の冬野菜は始まりがやや遅れたが、好天で順調に仕上がり、10月の台風の直接の被害もなく、関東の食卓に届き始めた。関東の露地野菜は、９月の長雨の影響で定植がずれ込むなどしたため、年明けまで影響が残ると予想される。この10年以上にわたり、強風など自然災害に対する生産者の適応力が高まってきたものの、「令和８年千葉豪雨」など近年見られなかった８～９月の豪雨や長雨、日照不足には抗しきれなかった。東北・北海道産や高原野菜は、通常通り10月も順調に出荷された。レタスとトマトは価格が高かったが、野菜価格高騰のニュースは長くは続かなかった。この先12月まで、積雪前の東北産の生産・出荷が順調に推移すれば、相場は落ち着いてくると予想されるが、一部の生産地域からの出荷減少が顕在化するような事態になれば、野菜価格は少なくとも年内いっぱいは高めに推移するとみられる。



【根菜類】



だいこんは、千葉産は、年内の出荷は少なめであるが、２月中旬には回復する見込みである。神奈川産は、９月は晴天の日がほとんどなく、降雨が続いて圃場（ほじょう）に入ることもできず、台風で土砂が流出して圃場が消失したところがあった。８月に播種（はしゅ）したものの出荷が始まったが、11月に入り少なくなる見込みである。年内の出荷は全体に少なく、年末の「三浦大根」も少ないと予想される。徳島産は、作付けは若干増加しており、11月４日から出荷が開始した。東京市場では、12月10日前後から出荷が始まり、１月いっぱいの出荷となる見込みである。

にんじんは、千葉産は平年並みの11月上旬から出荷が始まり、ピークは12月中・下旬と予想される。現時点（11月初旬）で播種は終わったが、雨で播種できなかった圃場もある。全体としては、平年の８～９割程度の出荷となると予想される。肥大は今後の天気次第であるが、当面はMサイズ中心と予想される。長崎産の冬にんじんは、生育が順調で、現時点で農協集荷が始まったところである。出荷は、地元の市場から広島・大阪市場へと展開され、12月上旬をピークに年内から年明けまで続くと予想される。香川産の金時にんじんは、前年並みの作付けで10月30日から出荷が始まった。出荷のピークは、12月初めから20日ごろまでとみられる。生育は順調で、サイズは前半はＬおよびMを中心に出荷され、後半には２LとLが中心となると見込まれる。



【葉茎菜類】



キャベツは、千葉産は、現時点（11月初旬）では、小ぶりであることや拾い採り（大きさや巻きの状態を一つずつ手で確認しながら収穫すること）をしていることなどから、平年の３分の１程度の出荷となっている。８月下旬から10月初旬まで40日ほど雨天が続き、年内は回復過程にあり、12月には平年の７割程度と予想される。出荷が平年並みとなるのは２月中・下旬と見込まれる。神奈川産は、上述のだいこんと同様であるが、だいこんよりは少し良い状況にある。出荷は平年の７割程度で、年明けには回復に向かうと予想される。愛知産は、９月の降雨と日照不足から、現時点では若干少なめの出荷となっており、11 ～ 12月も平年の９割程度と、前年に続き２年連続で少なめの出荷と予想される。回復は１月下旬から２月ごろと見込まれる。

はくさいは、茨城産は、定植時期に降雨が多く、本年産の出荷は完全には回復しないと見込まれる。12月には出荷量がまとまってくるが、前年を下回ると予想される。兵庫産は、早いものの出荷が11月から始まり、３月まで続くと見込まれる。定植は、一時的に遅れたものの、ほぼ平年並みに終了した。出荷のピークは12

月～翌１月で、年内は関西市場が中心となるとみられる。年明けには、関東にも一部出荷される予定である。

ほうれんそうは、群馬産は、晩夏から秋の長雨の影響で播種できなかった圃場があることなどから、年内の出荷は平年の８～９割で推移するとみられる。回復に向かうのは、年明け以降と予想される。埼玉産も同じく、播種が順調でなかったことから、年内の出荷は平年の８割程度と見込まれる。

ねぎは、茨城産は、県西の産地から、年内から年明けまで潤沢に出荷されると予想される。前々年、前年と若干不作傾向であったが、今年は生育順調である。千葉産は、11月に続き12月も豪雨の影響で、出荷は少なめである。年内の出荷は平年の５～７割で、年明けには同８割程度まで回復すると見込まれる。群馬産は、現時点で下仁田ねぎの出荷は始まっており、11月中旬から12月いっぱいまでがピークである。晩夏から秋の長雨の影響で、生産量は平年を下回ると見込まれる。埼玉産は、９月の降雨で生育が遅れたが、10月の好天で回復してきた。当面の出荷のピークは12月下旬から１月で、前年並みかやや少なめと予想される。

ブロッコリーは、愛知産は、10月末時点では平年の５～６割程度の出荷であった。圃場で腐りが発生し、また、樹ができていないなどのダメージが見られた。12月には、前年の７～８割まで回復すると見込まれるが、回復するのは月の後半とみられる。香川産は、当初は干ばつ傾向のため生育が遅れたものの、９～10月の降雨で遅れを取り戻した。台風などの大きな自然災害がなく、12月の出荷は11月に引き続きピークとなり、１月も順調に出荷されると見込まれる。熊本産は、定植が集中した関係で、出荷のピークは11月上旬となる。11月下旬にはいったん出荷が減少するが、12月には再び増え、12月の出荷は平年並みと予想される。

レタスは、静岡産は、定植のずれ込みなどから平年よりも１週間ほど遅れて11月１日から出荷開始となる。11月の出荷量は平年より少なめで、12月10日ごろから増加するとみられる。作付けの減少もあり、12月の出荷量は前年を下回ると予想される。サイズは、平年並みのL・2Lと見込まれる。千葉産は、12月初めからの出荷となるが、長雨の影響などから前年よりやや遅れており、12月の出荷量は少なめと予想される。12月後半には、出荷がかなり盛り返してくるとみられる。香川産は、例年10月15日ごろから出荷が始まるが、９～10月上旬に降雨が多く、出荷が若干ずれ込んでいる。12月には平年並みに回復し、１月も引き続き順調な出荷が予想される。長崎産は、出荷が前倒し傾向で一気に増え、年内いっぱいはピークが続く見込みである。サイズは3Lで段ボール当たり12玉中心の出荷となっている。出荷先は、九州・中国・関西の市場である。



【果菜類】



きゅうりは、埼玉産は、11 ～ 12月は抑制の加温物で、出荷は11月中旬までは多いが、その後は減少しながら推移するとみられる。９月の長雨の影響から10月に入って作柄が悪化したものの、その後は好天により回復した。前年は高温の影響で12月までの出荷が少なかったが、今年の出荷量は前年を上回ると予想される。千葉産は、生育は順調でほぼ平年と変わらず、天候の影響などで若干の波はあるものの、年末ごろから３月までが出荷のピークと予想される。高知産は､越冬の冬春きゅうりとなるが、現時点（11月初旬）において、生育は順調である。９月に入ってからの定植であり、猛暑の影響は受けていない。12月中旬が出荷のピークで、１月も多いまま推移するとみられる。宮崎産は、作付けは前年比98%とわずかに減少したが、夏季に異常高温がなかったことから、現時点では生育順調で、平年通り11月から12月中旬が出荷のピークと見込まれる。

なすは、高知産の出荷開始は平年通りであったが、10月下旬になって朝晩の冷え込みが大きく、出荷が減少した。今後の出荷は、１～２週間程度ずれ込むと予想される。12月の出荷

は、大きなピークはなく、平年を下回ると見込まれる。福岡産は、夏季の猛暑の影響から出荷開始が平年に比べ７日程度遅れたが、現時点で生育は順調である。11月下旬には、まとまった数量が出荷されるとみられる。12月に入りいったん出荷が減ると予想されるが、天候は安定しており、年末に大幅な減少はないと予想される。

トマトは、愛知産は、７～８月に定植された冬春トマトが出荷されるが、12月の出荷物は、９月の曇天で花が飛んだ影響から生育が遅れた。その後は生育が回復し、12月～１月が出荷の大きなピークと予想される。作付けは前年並みである。熊本産は、前々年および前年は、下の段のものが実割れするなどして出荷量が少なかった。今年は天候が平年並みとなり、特に９月の降雨が好影響を与え、出荷は11月に続き12月も潤沢であり、特に11月中旬から12月上旬には出荷が大きく伸びてくるとみられる。品種は、TYプリマドンナが中心である。福岡産は、11月末ごろから出荷のピークになるが、猛暑の時期をずらして定植を遅らせたためタイミングとしては遅れている。品種は桃太郎ブライトのほか、TYプリマドンナであるが、特に後者は収量性に優れている。

ミニトマトは、愛知産は、秋冬作となり12月に入って出荷のピークを迎える。９月の曇天続きで花飛びが発生したが、10月に好天が続き、現時点では生育順調である。作付けがやや減少しており、その分だけ出荷も減少することが見込まれる。和歌山産は、10月までは出荷が順調に推移すると予想されたが、根元に近い部分で花飛びしたほか、樹が着果疲れでやや弱っている。出荷のピークは、年末年始と見込まれる。熊本産は、現時点では生育順調であるが、今後、気温が下がってきたときにハウスの暖房が十分でないと、生育の遅れが発生する恐れがある。11月下旬から12月上旬にかけ、出荷が早めの生産者によるピークがあると見込まれる。前年と同様の条件であれば、年末の最終週が２回目の出荷ピークとなるとみられる。品種は、小鈴（こすず）と千果（ちか）である。

ピーマンは、茨城産が秋作の終盤物と温室物となるが、燃料代の高騰と作付けの減少などにより、出荷は平年を下回るとみられる。秋物は、11月20日過ぎには徐々に樹を抜き始め、12月末ごろには春物の定植が始まる。高知産の冬春ピーマンは作付けが増加して生育も順調で、当面は11月中・下旬が出荷のピークとなり、12月には冬の寒さと短日もあって減少が見込まれる。再び出荷が増加するのは、２～３月と予想される。宮崎産の促成ピーマンの出荷は順調で、11月中旬にピークを迎えた後、年末ごろに再び出荷が増加するという展開が予想される。作付けは微減である。



【土物類】



ばれいしょは、北海道産の収穫が11月上旬の段階で全道において終わったところだが、数量としては平年並み（過去10年の平均）とのことであった。天候はここ数年の傾向とは異なり、やや冷涼だったので順調に仲びると予想されたが、実際は地域によって降雨に差があり、平年値に追いついた。道央の羊蹄山麓の産地では、10月中旬で収穫は終わった。平年並みの作柄だが、日照不足から全般的にやや小ぶりの仕上がりとなった。長崎産の出荷は例年通り11月下旬から始まり、１月がビークで２月いつばいまでの見込みであり、作付けは前年並みである。

たまねぎは、北海道の令和８年産は、天候に恵まれ豊作で、11月に続き12月も、不作であった前年を上回る出荷が見込まれ、年明け後も５月まで計画出荷していく。サイズの中心はL大である。兵庫産は、年明けに若干残るものもあるが、ほぼ年内いっぱいの出荷である。12月としては若干少なめで、主に関西の市場に出荷される。

さといもは、埼玉の８年産は生育順調で、長雨はあったが、その影響はなく土中でしっかり生育した。年内は、12月26日の販売で終了すると見込まれる。新潟産の五泉のさといもは、平年作と見込まれ、凶作気味であった前年を上

回る出荷が予想される。12月に出荷のピークを迎えるが、年明けまで出荷は続く見込みである。中心サイズは、２LとLが同量程度とみられる。静岡産のえびいもは、出荷が始まっており、11月には徐々に増加して12月にピークを迎えるとみられる。９月に降雨が続いたが、その影響はなく、平年作と見込まれる。サイズはLが中心と前年より若干小さめであることから、出荷量は前年を下回ると予想される。愛媛産の女早生は、出荷が今後増加して年内にピークを迎え、３月まで出荷される。12月は例年並みに全国に出荷されるが、23日の販売で終了すると見込まれる。千葉産の八頭は、例年通りであれば12月15～20日を中心に７日間程度出荷されると予想される。



【その他】



れんこんは、茨城産は、９月までの出荷実績は前年の９割程度であった。生産者によると、単収は平年の７割程度とされ、春の低温やその後の干ばつが影響したとみられる。12月までは平年の８～９割程度の出荷ペースを維持し、年明けから減少すると予想される。

ごぼうは、青森産中心の出荷であるが、価格は平年並みである。８年産は虫害が多発し、高品質のものが少なめである。熊本産は、出荷が遅れ気味で12月に入り出荷開始されるが、近年は、２～３月までの冬作が増え５～６月の春作が減少する傾向にある。生育は順調である。

かぼちゃは、北海道産は貯蔵物となるが、平年並みに12月10日で出荷が切り上がる。８年産は、８月までの干ばつで日焼けが発生し、全体として出荷減となった。別口の貯蔵向けは、平年並みの数量である。鹿児島産は、生育は順調で、生産量としては前年並みと予想される。平年同様に12月初めから出荷が始まり、年明けも若干残ると見込まれる。降水量が少なかったため、サイズは一回り小さく、段ボール当たり５～６玉サイズで、１玉1.7キログラムおよび1.2キログラムのものが中心とみられる。

豆野菜は、鹿児島産のスナップえんどう（実えんどう）を中心に、グリーンピース（実えんどう）、そらまめの出荷が見込まれる。今年は高温と干ばつで播種が遅れたが、その後は生育順調である。現時点（11月初旬）で出荷は始まっているが、12月に入り量がまとまり、連日の出荷になると予想される。

かんしょは、茨城産は、７～10日程度出荷が遅れ、10月末ごろにピークを迎えた。大ぶりに仕上がっているものもあるが、やや小さいものが多く、平年作かやや少なめと見込まれる。年内は紅優甘（べにゆうか）が中心の出荷とみられる。千葉産は、９月までの長雨の影響などから、出荷が10日から２週間程度遅れた。仕上がりは例年通り良好である。10月末には収穫のピークとなったが、いものサイズは大小満遍なくそろい、平年作をやや上回ると予想される。12月までは、ベニアズマとシルクスイートが出荷される。徳島産は、今年はやや小ぶりの仕上がりであるものの、平年作と見込まれる。年内は、12月26日の販売で終了するとみられる。

セロリ（セルリー）は、静岡産は、平年同様に11月上旬の後半から出荷が始まるり、ピークは平年同様の12月中旬から１月と見込まれる。ただし、９月の長雨の影響でやや細めであり、株としてはやや軽めの仕上がりと予想される。

菜の花（ナバナ）は、千葉産は、９月の大雨と台風第25号の影響で播種し直したことなどから、生育は遅れている。年内は出荷できない生産者も多く、12月の出荷は平年の３割程度と予想される。年明けの１月下旬から出荷が増加してくることが見込まれる。福岡産は、11月初めから出荷が始まり、ピークは２月と見込まれる。定植作業はまばらで12月は多くはなく、当面は地元や関西の市場での販売が多いとみられる。福岡県内の作付面積は、生産者の高齢化などから、近年は微減傾向である。

カリフラワーは、福岡産は、10月末に出荷が始まったが、11月から増え始め、最大のピークは１～２月とみられる。出荷は５月まで継続する。前々年、前年と不作気味であったが、今年は豪雨もなく順調で、両年を上回る出荷が期待されている。熊本産は、近年は作付けが徐々に増加しているが、同じ面積でブロッコリーより多く栽培できることがその理由の一つとされる。生育は順調で、出荷のピークは12月と見込まれる。

せりは、宮城産は、９月に長雨があったものの、作柄としては順調である。出荷のピークは12月20日ごろから今年の止市（年末最後の取引・競り日）までとみられ、東北や京浜の市場に出荷される。その後は、３月まで出荷が続くと予想される。

みつばは、茨城産の切りみつばは、８～９月の天候不順で根株が十分に育っていない。水耕の糸みつばは、平年通り２月下旬をピークに出荷されると見込んでいる。

七草は、佐賀産は12月27日から東京市場へ販売される。播種は終了しており、生育は順調である。九州各地と東京市場には、200グラムパックで出荷される。中心産地は県北の佐賀市の旧富士町周辺で、生産者戸数は変わらない。

くわいは、広島産は、11月９日から出荷も開始し、12月の市場ではクリスマス前に終了する。ほぼ平年と変わらないタイミングとみられる。作付けは、前年比でやや減少している。前年より気温の低下が早く、その分だけ前年よりやや肥大していると予想される。

いちごは、栃木産のとちあいかは、９月の長雨で畝が崩れるなどして定植が遅れた。現時点（11月初旬）で出荷は始まっており、12月20日前後に頂果房（最初に形成される最上部の果房）生成のピークを迎えると予想される。福岡産のあまおうは、順調に生育しており、12月中旬に出荷のピークを迎え、年内いっぱい出荷が続くと見込まれる。今後、大きな天候の乱れがあると、出荷ピークがずれる恐れがある。

（執筆者：千葉県立農業大学校
講師　加藤　宏一）